

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 5日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2009～2011

課題番号：20720095

研究課題名（和文） 現代イランにおける「詩の夕べ」の社会的・文化的機能の研究

研究課題名（英文）

Social and cultural function of <Poetry Reading Night> in modern Iran

研究代表者

前田 君江 (MAEDA KIMIE)

東京大学・大学院総合文化研究科・非常勤講師

研究者番号：40466818

研究成果の概要（和文）：1960-70年代を中心とした「詩の夕べ」という文化的イベントの現代詩における意義と、反パフラヴィー朝運動が高まっていく時期の政治的背景と聴衆の不満のほけ口という社会的要因を分析し明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study analyzes literary function of 1960-1970s' <Poetry Reading Night> in Modern Persian poetry and political function of poets' live performance and audience.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：イラン・ペルシア文学、イラン現代詩

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：イラン、ペルシア、中東、詩、現代詩

1. 研究開始当初の背景

- 1) 申請者は、博士論文「アフマド・シャームルーの非韻律詩の詩学とリズム構造の分析」（東京外国語大学大学院、学術博士、2004）で扱ったノーベル文学賞候補詩人アフマド・シャームルー Ahmad Shamlu (1925-2000) の研究の中で、この詩人が深く関わった「詩の夕べ」に注目するようになった。
- 2) さらに、「詩の夕べ」が、
 - ① 詩人と聴衆との間で、より積極的な文学的・社会的交感が行われる場であること、
 - ② 聴衆が、詩人に対し、詩の芸術性を選択し、さらには、政治的メッセージの発信を要求する

動的・能動的なファクターとして存在したことから、文学史のみならず、政治史の観点からも重要な文化イベントであると位置づけた。のである。

- 3) また、同時代の研究記述からも、元来、芸術集会であった「詩の夕べ」が、政治集会へと「変質」していく様子が記録されていることから、作品研究・個々の詩人研究の観点から同イベント分析するとともに、政治的・社会的背景を絡めながら同イベントの全体像を明らかにする必要があると判断した。
- 4) さらに、研究代表者は、「詩の夕べ」において最も人気を博した

上述の詩人アフマド・シャームルーによる同イベントの音声資料を独自に入手した。これらには、のちに一般に流布・販売された音声テープでは編集・削除された会場の雑音・聴衆の熱狂的な反響や怒声が記録されており、極めて資料的な価値が高い。本研究において同資料の分析・活用を目指した。

2. 研究の目的

研究の目的は、以下の4点である。

1) 「詩の夕べ」記録資料の検証と断片的記録の体系化。初期「詩の夕べ」の記録は、各詩人資料などに断片的に現れるため、これらを収集し、体系化する必要がある。一方、後期「詩の夕べ」の多くは、プロスィーディング資料を刊行しているが、とくに政治性を帯びた集会である場合、これらの資料は、必ずしも実態を反映してはいない。文芸誌や新聞等の記述、詩人資料、音声・映像資料を用いて、記録資料の検証を行うことを目指した。

2) 「詩の夕べ」の文学史的意義の再考。従来の文学史は、詩集や文芸誌での作品発表など、エクリチュール（書かれたもの）としての文学テキストのみを対象としてきた。本研究では、「詩の夕べ」における詩人の朗唱パフォーマンス、および、詩人と聴衆との交感を、音声・映像資料を用いて考察する。「詩の夕べ」の文化的成熟と政治化していく動向を併せ、イラン現代詩の興隆期の特徴を、詩の音声/聴衆/ライブ・パフォーマンスの側面から再構成することを目指した。

3) 「詩の夕べ」の社会的・政治的機能の検証。70年代の反体制運動において、「詩の夕べ」が果たした社会的・政治的役割を考察する。特に、同時期の反体制的な政治活動と、「詩の夕べ」における聴衆の「政治主体化」との関連を検証することにより、詩人ではなく聴衆が、文学者と集会を、政治的に扇動していくプロセスを明らかにすることを目指した。

4) 海外ディアスポラ（離散）における「詩の夕べ」の社会的機能海外コミュニティにおいて、「詩の夕べ」が、いかに文化的・民族的アイデンティティ確認という機能を担ったかを明らかにする。海外イラン人コミュニティの文化的特質の中で、詩と詩の朗唱会が多く、イラン人を結集させた要因を明らかにすることを試みた。

3. 研究の方法

- 1) 研究代表者は2002年に、研究報告「現代イラン・ペルシア詩における『詩の夕べ』」(イラン研究会、同志社大学)を行っており、主要な15の「詩の夕べ」の基礎情報を把握した。これに基づき、「詩の夕べ」を、以下の三期に分けて分析した。

第一期

1960年代初めに「詩の夕べ」が誕生し、新体詩の朗唱会として全国的にブームとなるまでの時期。

第二期

1968年から70年代末であり、芸術集会であった「詩の夕べ」が政治集会へと「変質」していく時期。さらに、

第三期

1979年イスラーム革命以降に、北欧・北米を中心とするディアスポラ（離散）の海外イラン人コミュニティにおいて、「詩の夕べ」が開催された時期。このとき、「詩の夕べ」は、本国イランのイスラーム政権に対する政治批判とともに、アイデンティティ確認という社会的機能を担った。

- 2) 従来の音声資料に加え、研究代表者が入手した未編集の音声資料を使用し、とくに、朗唱者（詩人）と聴衆とのやり取りに注目しながら、文学および「詩の夕べ」が政治化していくプロセスと具体的な形態を分析するという方法をとった。
- 3) 文芸新聞等の記述から、「詩の夕べ」の基礎情報を収集し、従来、欠如していた「詩の夕べ」の発展史の全容を補完した。
- 4) 研究代表者がこれまでに行ってきたシャームルーの個人資料と作品批評・作品受容研究に基づき、「詩の夕べ」におけるライブ・パフォーマンスと聴衆による文学的・政治的反応が作品受容の形成に果たした役割を考察した。
- 5) 「詩の夕べ」に見る、「文学の政治化」の動向を考察する。聴衆が、愛や自然といったテーマを拒否し、政治的メッセージを要求していく経緯と、当時の文学動向との関連を検証した。とくに、社会主義リアリズムと混交したアンガージュマンと、「詩の夕べ」の政治集会化との関連を考察した。
- 6) 「詩の夕べ」の政治集会化に対する、詩人たちの対応を考察した。聴衆の要求に応じ、詩人たちが、作品を「政治的・反体制的」に見せるために、朗唱法や身振り・手振りなど、ライブ・パフォーマンス上の工夫を凝らした実態を明らかに

- する。
- 7) 北欧・北米での「詩の夕べ」に関連する基礎情報を収集する。
 - 8) 「詩の夕べ」で朗唱された作品理解の基礎研究として、詩人研究・作品研究を広く行う。

4. 研究成果

- 1) まず、基礎研究と研究対象となる時代の主要な詩人に関する文学史研究、および作品研究をひろく行い、『イラン現代詩集』土曜美術社出版販売、2009（共訳、共著）として出版した。
- 2) 1968年に開かれた、シャームルーの二つの「詩の夕べ」の音声資料の検証を通じて同集会での、聴衆とのやり取りや、朗唱作品の選択に対する聴衆の反応・非難が、同時期の文学と「詩の夕べ」の政治的変容を裏付けるものであることを明らかにした。
- 3) 「詩の夕べ」において、文学のアンガージュマン（政治参加・社会参加）の理念に反する恋愛詩などの作品への非難や排除が、逆に、作品解釈・批評や作品受容の形成に及ぼした影響を明らかにした。
- 4) 「10日間の詩の夕べ」の記録資料の検証を行った。同集会については、主催団体によって全プログラムの記録資料が刊行されているが、最後の数日は、秘密警察の急襲により開催されなかったとも言われる。各研究文献に見られる情報の不一致を、個々の詩人資料、当時の文芸新聞などの記述を通じて検証した。
- 5) また、1979年のイスラーム革命後、「詩の夕べ」が、海外のイラン人コミュニティへ広がっていったプロセスを分析した。とくに、人気詩人シャームルーやベフバハーニーの資料によれば、1990年代のアメリカ・カナダでは、数千人規模の「詩の夕べ」が、多く行われている。国内における集会の規制、および、亡命知識人の巨大コミュニティのなかで、イランへのノスタルジーや文化的アイデンティティの確認、さらには、革命体制批判の手段として、「詩の夕べ」をはじめとする詩の朗読会がさかんに行われたことを明らかにした。
- 6) さらに、海外コミュニティにおける、「詩の夕べ」の特質として、新体詩のみならず、古典詩の朗唱が大きな割合を占めることや、イラン本国からの人気詩人の招聘、さらに、開催規模が極めて大きいことなど、開催状況の特徴を明らかにした。さらに、イスラーム革命後、イラン本国において文学集会が禁止され、政治的発言が制限された状況の下、国外の

「詩の夕べ」では、本国のイスラーム政権を非難するメッセージを発信することができるという代替的な政治的機能を果たしたのである。

- 7) また、シャームルー資料に基づき、海外の詩の夕べで朗唱された詩の多くが、革命前に書かれた反体制の社会詩・政治的抵抗詩であったことを明らかにした。すなわち、王政打倒の詩が、王制崩壊後に再び新体制批判の詩として読まれるようになったのである。これらの詩の受容（読み）を再創造・再生産した文学的磁場として、海外の「詩の夕べ」が機能していたことを明らかにした。
- 8) さらに、シャームルーの社会詩・抵抗詩における詩的技法と詩形態についても分析を加えた。初期詩作、および、非韻律詩の詩的リズム確立の過程で多用された反復やリフレイン技法、さらに固有名の効果的仕様などが果たす詩的機能を明らかにした。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

石井・啓一郎・前田君江「ゴルシーリー小説『公序良俗小説』をめぐって～訳文と作品解題～」『イラン研究（大阪大学大学院言語文化研究科・言語社会専攻・専攻言語ペルシア語）』第6号、2010, pp. 27-40

前田君江「ペルシア語訳『法華経』とホウゼ発の仏教講義・仏教書」『オリエント』54巻第2号、2011, pp. 123-126

〔学会発表〕（4件）

前田君江「詩人アフマド・レザー・アフマディー（2010年国際アンデルセン賞候補）の童話の世界」イラン研究会、大東文化大学（板橋校舎）、2010/3/28

」前田君江「*Images of Women in Poetry of Ahmad Shamlu: from 'Fresh Air' to Ayda*」（ペルシア語）、国際ワークショップ「語り手と女：ジェンダーを巡るイランの文学的言説の研究」（科研費基盤研究B、研究代表者藤元優子）大阪大学（吹田キャンパス）、2010/11/27

前田君江「イラン国民的詩人の肖像——アフマド・シャームルー（1925-2000）」現代中東文学研究会、京都大学、2012/1/22

前田君江「1979年の詩『この行き止まりで』（アフマド・シャームルー）の受容と技法——革命から「緑の運動」まで」イラン研究会、東京外国語大学、2012/3/31-4/1

〔図書〕(計1件)

鈴木珠里、前田君江、中村菜穂、ファルズイン・ファルド(共著・共訳)『イラン現代詩集』土曜美術社出版販売, 2009

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕

Web 論考

前田君江「ノー・フォト——イランの詩の物語(1)」2009/12

(<http://www.mi-te-press.net/essay/bn0912.html>)

前田君江「七つの日、七つのいろ——イランの詩の物語(2)」2010/6

(<http://www.mi-te-press.net/essay/bn1006.html>)

前田君江「『ペルシア猫を誰も知らない』脚本を書いた発禁小説家」2010/12

(<http://www.mi-te-press.net/essay/bn1012.html>)

前田君江「詩は唄う(1)——詩とリフレイン」2011/6

(<http://www.mi-te-press.net/essay/bn1106.html>)

前田君江「詩は唄う(2)——詩とリフレイン・その2」2011/12

(<http://www.mi-te-press.net/essay/bn1112.html>)

図書掲載論考

前田君江「(解説) 真珠の首飾りの破壊者たち~ペルシア新体詩の誕生」『現代イラン詩集』(鈴木珠里、前田君江、中村菜穂、ファルズイン・ファルド共著・共訳)『イラン現代詩集』土曜美術社出版販売, 2009,

6. 研究組織

(1) 研究代表者

前田 君江 (MAEDA KIMIE)

東京大学・大学院総合文化研究科・非常勤講師

研究者番号: 40466818

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: